English Focus

高校英語情報誌

Vol.4
2026.05

バックナンバーも
お読みいただけます

KAIRYUDO

次期学習指導要領を想定した教材と指導の在り方を内蔵した教科書

ー 他にはない魅力に満ちた題材を網羅 ー

大阪樟蔭女子大学名誉教授　菅（かん） 正隆（まさたか）

学習指導要領の改訂を見据える

次期学習指導要領の全容が明らかになりつつあります。次期改訂で求められる学校教育の基本的な考え方は、教科書の教材や指導の在り方で表すことができます。つまり、従前からも中央教育審議会等で論じられている、

① 「主体的・対話的で深い学び」の実装（Excellence）：
生きて働く「確かな知識」を習得すること、学びに向かう力、人間性等を育成することが一層できるようにすること

② 多様性の包摂（Equity）：
多様な個性や特性を受け入れ、一人一人の意欲を高め、可能性が開花し、個性が輝く教育の実現を目指すこと

③ 実現可能性の確保（Feasibility）：
①と②を支えるための整備や方策を意味し、デジタル学習基盤の更なる充実、教科書や教材、指導書の改善、必要な設備の整備、総合的な勤務環境整備とも相まって通底させるべき必要条件のこと

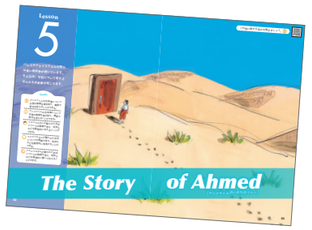
これらは、現行の学習指導要領にもある考え方であり、今回紹介する教科書の根底にもあるものです。

変化の時代に対応する教科書

現在、アナログの時代からデジタルの時代へと短期間で変化し、生徒たちも俗にいうＺ世代からα世代へと移り変わりつつあります。そんな変化の時代に、昭和の遺物のような教科書で従来通りの指導をしていては、生徒の興味を低下させ、さらには英語嫌いを生み出し、ひいては学力の低下にも繋がりかねません。市井では「AI を使えば、英語の先生は必要ないのでは」との声が聞こえてきます。次期学習指導要領の登場を控えた今、AI には決して真似できない教師一人ひとりの魅力を生徒に伝え、英語学習の楽しさを感じ取らせ、授業を通して生きる力の醸成を図れるよう、今回 *Amity II*, *Bloom II*, *Stellar II* の３種の教科書を自信をもって紹介いたします。

前述の次期学習指導要領の基本的な考え方の①及び②を取り上げると、例えば *Amity II* の Lesson 6, *Bloom II* の Lesson 5, *Stellar II* の Lesson 5 で取り上げた『アハメドくんのいのちのリレー』（原典:集英社）では、パレスチナとイスラエル間の長い紛争の中で起きたある出来事を通して「平和とは何か」「人間の命とは何か」を考えさせる機会を提供しており、生徒自身が他の生徒との対話によってさまざまな考え方に巡り合い、自分自身の考えを深めていくプロセスが暗に仕組まれています。また、③を意識し、デジタルのさまざまな活用を通して、さらに進化した深部への指導も可能となっています。

是非、決して他にはない魅力的な題材を通して、生徒の個性や特性を磨き輝かせていただきたいと願っています。



Bloom II　pp.52-53

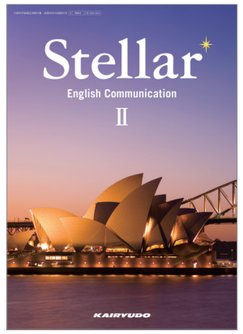
私のイチオシ！

３種の教科書共通でLesson 1で取り上げている「Okinawa」です。沖縄の自然、食、歴史等、今にも旅したくなる気持ちにさせます。

Amity II　pp.6-7

Bloom II　pp.14-15

Stellar II　pp.16-17



〈英コミュ ステラ Ⅱ〉

*Stellar*で広げ、まとめ、深め、発信する学び

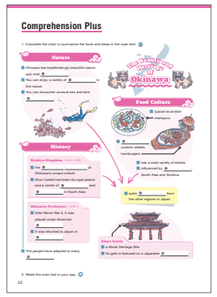
武庫川女子大学教授　田中（たなか） 真由美（まゆみ）

知識を広げ、まとめる

Stellar English Communication II（以下 *Stellar*）の本文は内容が非常に充実しており、地理や歴史など他教科での学びを土台としたものに加え、大学での学びを見据えたアカデミックな内容の入口となるトピックも取り上げています。生徒の知的好奇心を刺激し、「もっと知りたい」「さらに学びたい」という意欲を引き出してくれます。

各レッスンの内容が深い分、得た知識やストーリーなどの内容を整理して理解することが難しいと感じる場面もあるかもしれません。

そこで役立つのが、各パートの理解を支える問いに加えて、レッスン全体を見渡して理解を整理する Comprehension Plus です。本文の内容を振り返りながら、広がった知識を一つのまとまりとして捉えることができます。特徴的なのは、内容理解を支える見出しやイラストです。例えば Lesson 1 “The Beauty and Heritage of Okinawa” では、“Nature,” “Food Culture,” “History” のようにトピックごとに整理された見出しとそれらを具体的に示すイラストが用いられており、概要や要点を把握しやすくなっています。紙面はポスターのようなデザインになっており、このページを活用して、内容を英語で説明する活動や、読む前に見出しやイラストから内容を予測する活動にもつなげることができます。



Stellar II
Lesson 1　p.22

思考を深め、発信する

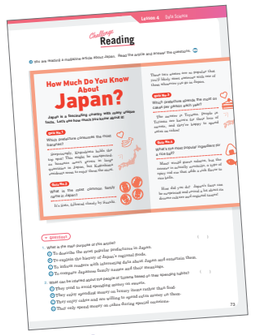
英語の授業では、本文を読んだ後に内容について考え、その理解をもとに発信する活動が行われます。*Stellar* では、読んだからこそ考えが深まる問いが丁寧に設計されており、読解を基盤とした思考と言語活動が結びつくよう工夫されています。

例えば Lesson 6 “How to Become a Smart Consumer” の Part 2 では、「アンカリング効果」や「フレーミング効果」といった消費行動に影響を与える現象について本文で触れたのち、それらの影響を受けた経験について考え、伝え合うための問いが Interaction というコーナーに設定されています。本文の内容を理解しなければ答えられない問いであり、理解した内容を自分の経験と結びつけて考えさせることで、読解と発信が有機的に結びつきます。こうした問いは、生徒の既存の知識や考えを更新し、より深い理解へと導きます。

Stellar ではこのように、読解を通して知識を広げ、それらをまとまりのあるものとして整理し、その内容について考えを深めて発信する活動が組み込まれているのです。

私のイチオシ！

各レッスンの課末にあるChallenge Readingは、雑誌や新聞記事などの多様なテキストを通して、レッスンの内容をさらに深めます。



Lesson 4　p.73

Lesson 10　p.173

〈英コミュ ブルーム Ⅱ〉

Bloom — 英語の力を花開かせる指導の設計図

元追手門学院大学教授　蛭田 勲（ひるた いさお）

今、英語教育業界に新たなブレークスルーをもたらす教科書、*Bloom English Communication II*（以下 *Bloom*）が誕生しました。グローバル化や内なる国際化が加速する現代において、英語教育に求められるのは、単なる知識や技能の習得にとどまりません。多様な価値観の中で問いを立て、自ら考え、他者と対話しながら課題を解決する力が不可欠です。こうした時代の要請を受け、次期学習指導要領では「探究」の強化を通して主体的・対話的で深い学びの実現が求められています。*Bloom* はこの理念を教室で「花開かせる」次代の教科書です。

◆ 探究につながるコンテンツ

Bloom が提供する全 10 レッスンの核、それは「クリティカルシンキング」です。データサイエンスの功罪を扱う Lesson 4 “Data Science”や、紛争下における人間愛を通して平和のあり方を問う Lesson 5 “The Story of Ahmed”に、行動経済学の視点から人間の意思決定を捉える Lesson 7 “How to Become a Smart Consumer”や、真の国際支援とは何かを問い直す Lesson 9 “A Drop of Hope”、スポーツ界におけるジェンダーギャップを通して多様性と包摂を考える Lesson 10 “Closing the Gender Gap” など、現代的で本質的なテーマが展開されます。これらは生徒の内に自然と「なぜ」という問いを喚起し、思考・判断・表現を伴う探究的な学びへと導きます。

◆ アウトプットの「質」を高める活動

Bloom の真価は、本文を「読み取って終わる」のではなく、その内容をもとに思考・判断を深める活動にあります。ここでは Lesson 9 “A Drop of Hope” を例に、授業がどのように「探究」へと昇華するのかを示します。

（1）主体的な学び

生徒は本文を読んで中村医師の行動をたどり、“Why did he change his approach to help people?”のような問いを設定します。本文を根拠に引用・要約を行いながら、自分なりの仮説を英語で形成します。このプロセスが学びを探究へと変える第一歩となります。

（2）対話的な学び

小グループで “What’s the best way to help people?” などの問いについて議論します。この過程で、AI を思考を深める「対話のパートナー」として活用します。生徒は自分の意見を英語で入力し、AI の多角的な反論に対して再反論を試みます。こうした AI との「対話的な壁打ち」を通して、論理性と多角的な視点を磨きます。

（3）深い学び

グループで再構築した考えを英語で発表・共有し、多様な意見に触れる中で自分の考えをさらに練り上げます。最後に単元末の Production を活用し、自分の価値判断に基づいた意見を英語で書く活動を通して学びを再構築し、より深い理解へと到達します。

このように *Bloom* は、英語を「学ぶ対象」から「思考の手段」へと転換し、授業を探究的な学びの場へと高める教科書なのです。

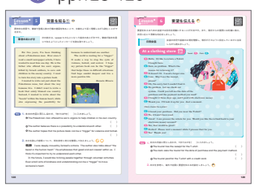
私のイチオシ！

私の推しはLesson+（プラス）というコーナー。大学入試に向けての読解スキルをわかりやすく示しており、教師と生徒の双方に役立つページです。

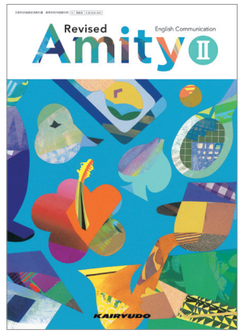
観光パンフレット　レポート

Bloom II　pp.124-125

pp.128-129



筆者のあとがき　日常会話



〈英コミュ アミティ Ⅱ〉

読みたくなる題材と、やさしく学べる工夫がつまった教科書

玉川大学講師　小金丸 倫隆（こがねまる みちたか）

◆ 圧倒的な題材の魅力で、生徒を本文へ引き込む教科書

生徒が「もっと読みたい！」と思うような「圧倒的」な題材の魅力が、*Revised Amity English Communication II*（以下 *Amity*）の自慢です。現行版の *Amity* でご好評いただいている題材に加え、高校生の興味に寄り添った Lesson 3「自然界のかわいい動物」や、社会的課題を扱った Lesson 4「災害時の安全対策」、消費者心理に関する内容を扱った Lesson 7「これってお得？」などが新たに加わりました。これらの魅力的な題材は、生徒を無理やり動機づけるのではなく、自然な形で生徒を英語の世界へと導いていきます。

◆ 「英語が苦手な生徒にも、安心して学び進めてほしい！」という願いを込めて

高校 2 年生の学習段階では、英語への苦手意識を引きずったまま学んでいる生徒も少なくありません。改訂版では、そのような生徒も無理なく学習を進められるよう、さまざまな工夫が施されています。文の長さ、本文中の表現、語彙の選定にいっそう配慮し、より理解しやすい紙面を目指しました。具体的には、一文あたりの語数を見直したり長い文は必要に応じて分けたりすることで、無理なく理解できる英文構成としています。加えて、本文内容の流れがつかみやすくなるよう活用頻度の低い語彙も見直し、生徒が英文を追いやすい形に整えています。また、側注の新語は 7 語までに徹底しました。新出語が多すぎると、それだけで本文を読む前に身構えてしまう生徒もいます。そこで語彙の負担を抑え、本文の内容理解に集中しやすい紙面づくりを意識しました。

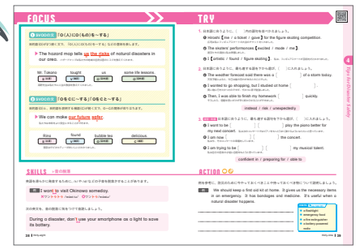
◆ 「さらに学びたい」という生徒の気持ちに寄り添う新コーナー「Lesson＋（プラス）」

改訂版では、新たに Lesson +（プラス） というコーナーが登場しました。このコーナーでは、フレーズ・リーディングやスキミングといった Reading Skills に関する活動に加え、本文に関する追加の読解活動、さらに本文内容を踏まえたアウトプット活動も掲載されています。*Amity* で学ぶ生徒の中には、レッスン内容についてさらに学びを深めたい生徒や、資格試験や大学受験に向けて、より発展的な学習に取り組みたい生徒もいるでしょう。新コーナー Lesson +（プラス） の登場により、*Amity* はこのような生徒の幅広いニーズにも対応できる教科書へと進化しています。

Amity II　p.130

私のイチオシ！

各レッスンの課末にあるFOCUSでは、厳選された必要最低限の文法説明を掲載しており、効率的な理解を支えます。



Lesson 4　pp.38-39

相補関係にある 文法とコミュニケーション

鳴門教育大学名誉教授　伊東 治己（いとう はるみ）

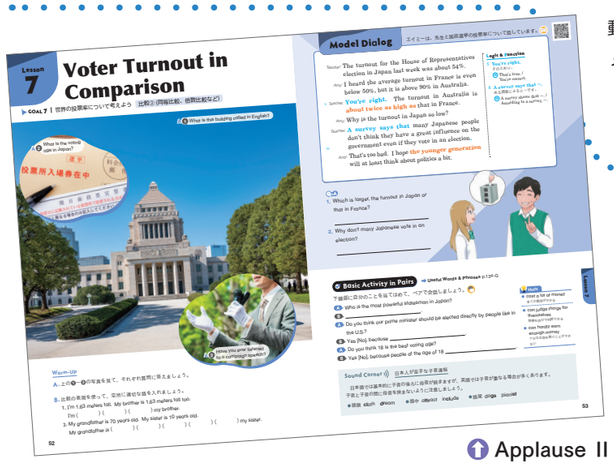
本誌 Vol.3 では、「文法は言語的創造性が達成されるための手段であり、文法の不完全な知識はコミュニケーション能力への深刻な阻害要因になりうる」という CLT 提唱者の一人である D. Wilkins のことばと、「文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、（中略）使用する場面や伝えようとする内容と関連付けて整理するなど、実際のコミュニケーションにおいて活用できるように、効果的な指導を工夫すること」という学習指導要領の提言をもとに *Revised Amity English Logic and Expression II*（以下 *Amity II*）と *Revised Applause English Logic and Expression II*（以下 *Applause II*）の「活動を通して文法とコミュニケーションの両立を目指す」という指針を提示しました。今回の Vol.4 では、基本的には同じスタンスに立ちながら少し違った観点から文法とコミュニケーションの関係に迫ってみます。

◆ 文法軽視ではない英語学習の考え方

「習うより慣れよ」という諺があります。これは、決して「習うこと」を否定するものではありません。英語学習で言えば、「文法なんてどうでもいいのでとにかくコミュニケーションを」ということではありません。習うだけで止まることを戒めて、慣れること、つまり実践の重要性を指摘しています。文法指導が批判されていたのは文法を習うことだけで終わっていたからであり、習った文法を実際のコミュニケーションの場で使うことが重要なのです。ただ、これだと実践こそが上達の決め手で、指導の流れが「文法からコミュニケーションへ」という一方通行になってしまいがちです。大切なのは、文法を習い、その知識がより正確なコミュニケーションを作り出してくれるだけでなく、コミュニケーションの中で文法を使うことで学習者の文法能力が補強・洗練されるという姿勢です。文法とコミュニケーションはあくまで相補関係にあり、文法力が円滑なコミュニケーションを支え、コミュニケーションの中で自身の文法力が強化・洗練されるのです。

◆ *Applause II* における文法とコミュニケーション

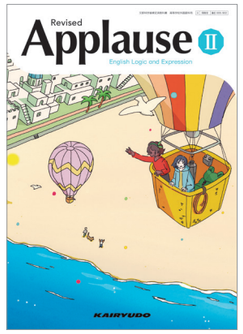
この立場は *Amity II* と *Applause II* においても堅持されています。例えば、*Applause II* を例にとると、各レッスンは3つの見開きで構成されており、最初の見開きは Model Dialog と Basic Activity in Pairs、２つ目の見開きは Focus と Exercises、３つ目の見開きは Main Activity と Further Activity となっています。各レッスンの Focus と Exercises で扱う文法範疇（はんちゅう）の配列は *Applause I* とほぼ変わりませんが、同じ文法範疇の中でも *Applause I* で扱わなかった発展的な項目を含むことでレベルアップを図っています。また、各レッスンのコミュニケーション活動で扱う内容も、*Applause I* 以上に社会性を意識しつつ生徒どうしのコミュニケーションを促すものを厳選しています。



Applause II Lesson 7　pp.52-53

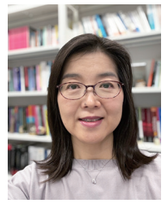
私のイチオシ！

選挙権年齢が18歳以上に引き下げられたので、高校生も積極的に取り組める内容になっています。



〈 論表 改訂アプローズ Ⅱ 〉

英語が動き出す！
―多様な活動で育む「英語で伝える力」



津田塾大学教授　奥脇 奈津美（おくわき なつみ）

Revised Applause English Logic and Expression II は、現行版の「3 見開きで 1 単元」という基本構成を維持しながら、英語を使って考え、表現する活動をより充実させました。最初の見開きでは、単元のテーマに関する大きな写真を活用した導入と Model Dialog を中心に活動を行います。次の見開きでは、その単元の文法事項の練習を行い、最後の見開きでは、それまでに学んだ内容を活用して発展的な活動に取り組みます。このような基本構成を踏襲しつつ、内容や活動をさらに充実させるために行った改訂のポイントを、いくつかご紹介します。

◆ Warm-Up A でモチベーションアップ

扉写真を刷新し、レッスンのテーマを表す鮮やかで大きな写真やイラストを配置しました。改訂版では Warm-Up A として写真に関する質問を用意しており、レッスンの導入として無理なく自然にペアで英問英答ができる内容になっています。

◆ Logic & Function の充実と Basic Activity in Pairs

日本語訳を巻末に移し、その代わりに Logic & Function として「言い回し」や「言語機能をもつ表現」とその類似表現を充実させました。単語を一つずつつなげて文を作るのではなく、表現をかたまりとして身につけて一定数蓄えることで、より自然に素早く口に出せるようになります。Basic Activity in Pairs では、学んだ表現の発話機会を増やし、少し長めのターンの会話の中で実際に使う練習を行えるようになりました。表現の幅が広がる Hints も追加されました。こうした活動を通して、英語の流暢さ（fluency）の向上を図ります。

◆「使ってみよう」を引き出す Perform

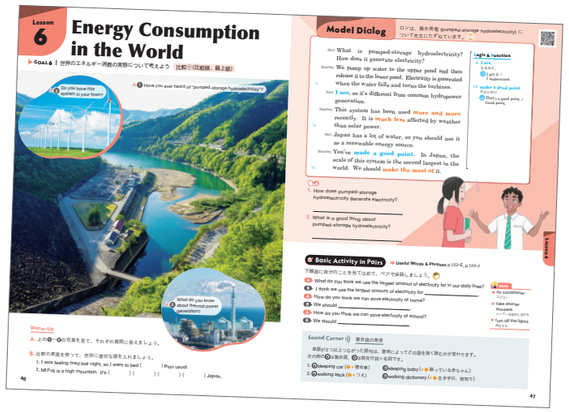
Focus や Exercises を通して身につけた知識を活用する言語活動については、活動内容の多様さが特徴です。ペアでの会話から、自分の意見の発表、グラフの考察、クイズの考案、自分の思いを書く活動など、多岐にわたる内容で生徒も先生も飽きさせません。文脈の助けを借りながら、学んだ文法事項を実践的に「使ってみる」ことができます。

◆ リスニングも取り入れて

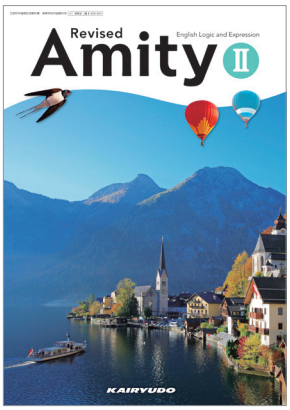
レッスンのゴールとなる Main Activity は、テーマに関する理解を深めながら段階を追って発表活動につながるように構成されています。最初の STEP 1 では、グラフを読み取ってメモを取ったり自分の意見をまとめたりといった活動から始めますが、今回の改訂では「Scaffolding（足場掛け）」としてリスニングも取り入れました。「論理・表現」は、最終的には英語で表現する活動（アウトプット）につながる力を育てる科目ですが、そのためには十分なインプットも必要です。インプットから入ることによって次のステップへとスムーズに進むことができ、さらにテーマへの理解もより深まります。このように、適度なインプットと段階的な活動を通して、生徒が無理なく英語で表現できる力を養うことを目指しています。

私のイチオシ！

水力発電との違いを考えながら、揚水発電の「仕組み」を英語で順序立てて説明する力を育てることができます。



Applause II Lesson 6　pp.46-47



〈論表 改訂アミティ Ⅱ〉

English is a lot of fun, isn't it?
（英語っておもしろくない？）

横浜薬科大学教職課程センター准教授　黒木（くろき） 太（ふとし）

◆ 英語で考え、伝える力を育てる

生成 AI が急速に発達している今日のグローバルな世界において、国際語である英語でのコミュニケーションは必要不可欠であり、英語の重要性が今後ますます高まっていくことは言うまでもありません。

*Revised Amity English Logic and Expression II*は、徹底したやさしい英文と語彙で基礎・基本の定着を図る基本路線は継続し、「英語で考え、伝える力」を育てることを大切にしながら、現行の学習指導要領に沿って改訂を行いました。具体的には、より理解しやすくするための DIALOG の見直しや、言語活動を増強するための DIALOG Plus の新設が挙げられます。英語が不得手な生徒でも、「自分はどう考えるのか」「それをどのように相手に伝えるのか」というプロセスを意識できるような構成になっており、楽しみながら英語を学ぶことができます。

各レッスンでは、身近で考えやすいテーマや場面設定を工夫し、生徒が「伝えたいことがあるから英語を使う」という自然な流れを大切にしました。また、意見・理由・具体例・結論といった論理の流れをくり返し扱うことで、無理なく表現の型を身につけられるようにしています。さらに、ペアやグループでの活動も多く取り入れ、お互いの考えに触れながら自分の考えを深めていく機会を充実させました。

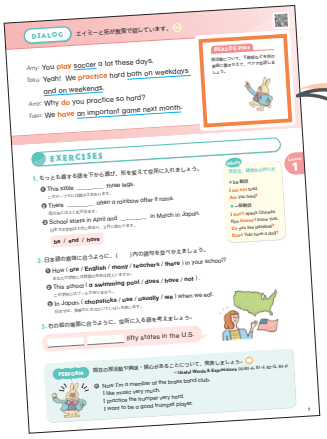
◆ 間違いを恐れず、試す場に

先生方には、本書を「知識を教える教材」としてだけでなく、「生徒が考え、試してみるための場」をつくるツールとして効果的に活用していただければ嬉しく思います。最初から完成度の高い表現を求めるのではなく、少しずつ考えを整理し、言い直したり書き直したりする過程を大切にしていただくことで、生徒の力は着実に伸びていきます。また、活動のねらいやゴールを共有することで、生徒の主体的な学びもより引き出され、深い学びに到達していくはずです。

生徒の皆さんには、英語を「正しく使うもの」と考えすぎず、「自分の考えを伝えるための道具」として、間違いを恐れず積極的に使ってほしいと思います。「伝えたい」という強い意志をもって「伝えよう」とする経験を重ねることが、確かな力につながります。本書の名前 Amity には「友好・親善」という意味が込められています。本書が周りにいる人々との友好を深める契機になるとともに、教室でのやり取りをより豊かにし、生徒一人ひとりの思考力・表現力を伸ばす一助となれば幸いです。

私のイチオシ！

新設のDIALOG Plusでは、既存の英語知識を総動員して、会話の“花”をたくさん咲かせましょう！



Amity II
Lesson 1　p.7

DIALOG Plus

部活動について、下線部などを別の表現に置きかえて、ペアで会話しましょう。

高校英語情報誌 English Focus Vol. 4　非売品
2026年5月11日印刷　2026年5月18日発行
編集兼発行人　井口廣之 / 発行所　開隆堂出版株式会社
本資料は一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

開隆堂出版株式会社
本社　〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 ☎ 03-5684-6111
https://www.kairyudo.co.jp/
北海道支社　〒060-0042　北海道札幌市中央区大通西11-4-21 52山京ビル7階　☎ 011-231-0403
東北支社　〒983-0852　宮城県仙台市宮城野区榴岡3-10-7 サンライン第66ビル5階　☎ 022-742-1213
名古屋支社　〒461-0004　愛知県名古屋市東区葵1-15-18 オフィスサンナゴヤ9階　☎ 052-908-5190
大阪支社　〒550-0013　大阪府大阪市西区新町2-10-16　☎ 06-6531-5782
九州支社　〒810-0075　福岡県福岡市中央区港2-1-5 FYCビル3階　☎ 092-733-0174

QR コードは株式会社デンソーウェーブの登録商標です。